

郵政産業労働者ユニオンの統一で目指すもの

2012.7.10

郵政産業労働者ユニオン・長崎
中島義雄

1、はじめに

7月1日、郵政産業労働者ユニオン（郵政産業ユニオン）が誕生しました。

全労協・郵政労働者ユニオンと全労連・郵政産業労働組合が、6年間の共同闘争（3度の統一ストライキなど）と、25回の統一協議の成果の上に、相互信頼を基礎に、対等合併の組織統合をなしたのです。結成大会は東京・神宮外苑内の日本青年館に双方の代議員が集い、圧倒的支持、賛成を得て、新労組がスタートしました。

私たちユニオン長崎はこれにどう向き合うのか。課題は三つです。

一つは、反対派労組の分裂を乗り越え、二労組が統一をすることは、困難な事業ですが、現状に合う労組の自己変革＝改革を成し遂げる一里塚です。

もともと息の合わない左派同士の統一なんて「到底できない」といわれた数年前の状況から、粘り強く話し合を行い、共同闘争で信頼を築き合い、ようやくスタート地点についたのです。

古くは革命方針を巡って、あるいは反合理化闘争や政治闘争、平和闘争を巡り、百年の仇敵とされ、分裂・対立をしてきた両者。この再統合は、日本労働運動の歴史の中で、実に六〇年ぶりの出来事で、この意味は大きいものです。

二つは、現場労働者の実態を正視することです。日本労働者の非正規雇用で貧困と格差に苦しむ人々の期待は、均等待遇と正社員化の安定雇用です。新生ユニオンはこの彼らの要求を第一に掲げ、社会と企業を変えるために、全力で邁進します。

三つに、八九年の労働界再編以降、三鼎立したナショナルセンターの枠を超え、統一をすることで、日本労働界の対立・固定化に風穴を開けたいと考えます。

全労協と全労連の違いなど、世界大恐慌の中で、新自由主義と闘っている世界労働者の闘いの激流と比し、いかに小さい課題であることが。

この日本労働運動が、本当に勝利するためには、まずこのことを最優先で取

り組まなければならないのです。

運動や組織は、最初を踏み出す人のまず一歩からです。どんなに困難でも誰かが始めなければ、事態は突破できないし、変化もおきません。

新生・ユニオンは「次世代に向け、新たな挑戦者たる役割」を自覚し、統一の成功を期し、新たな闘いに踏み出します。

以下、私たちはなぜ統一をなしたのか。そしてなにを目指すのか、などをいくつか、郵政労働者ユニオン長崎の機関誌「未来」に掲載したものに若干加筆し、いくつか述べていきます。

2、だれが仲間なのかの論。

昔、一揆に立ち上がった農民は、心を一つにして、お互い全存在を懸けました。

近隣在郷の農民が刻限を決め、ともに同じ相手に挑むという約束事が一揆を結ぶ＝「結集」なのです。これは仏教用語で、仏の前に心を一つにするという意味です。こうして共に立ち上がる人が本来の「仲間」です。

郵政ユニオンと郵産労は6年間、共同闘争を積み重ね、ストをともに闘ってきました。これこそ同志的結集、相互信頼の絆なのです。これを仲間と評価せず、だれを仲間だというのでしょうか。他労組内のユニオンの支援者も「仲間」ですが、だからと言って、郵産労を拒絶する論理は、片面の事実です。

3、信じる神が違う論。

「郵産労とは信じる神が違うからね」とよく言います。そうでしょう。支持政党や参加する上部や地域組織が異なるからです。

しかしです。

1637年、日本歴史上の最大の反乱・一揆とされる島原の乱。16村の4万人が決起した闘いです。

原城に立てこもった人には、文字通り信じる神が違う人も大勢いました。貧しい農民、キリシタン弾圧に抗した人、旧有馬藩の浪人＝下級武士など様々でした。

彼らは3か月間、城の中で「信じる神が違う」と離反していたのでしょうか。そんなことはありません。生死をかけて同じ敵に闘いを挑む人は仲間です。労働者も共通の敵に立ち向かえば、それは立派な仲間なのです。

4、一揆をする農民の権利。

昔の一揆は、年貢倍増などで起きました。生きていけないからです。秀吉の太閤検地時代から、徳川時代の約280年間、農民一揆は680回も起きています。「農民の反乱」、これが封建制度打倒の原動力となった歴史を日本人は持っています。

一揆の中で支配階級が一番恐れたのは暴動や打ちこわしではありません。それは、武力で鎮圧できたからです。彼らが一番恐れ、警戒したのは逃散です。村ごと農民が逃げ出し、生産の担い手がいなくなることでした。だから、畑（土地）と農民を結びつけ、支配したのです。

人には国家への異議申し立ての権利があります。これは被支配階級の、まさに生活権を奪われたときの、弱者の生きるための最低の道理です。

5、雇用形態の変化

産業革命以降200年間、資本主義社会は、労働の結果生み出された利益＝富の配分を賃金として受け取ることで労使の折り合いをつけてきました。

日本では明治以降140年間、日本独特の家父長制を基礎とした正社員の終身雇用、年功序列賃金でした。これがまた日本的な労使協調を生んだ背景、一億総中流論でした。

しかし、新自由主義社会では資本家が非正規雇用という乱暴な支配に転じました。富のさらなる独占が目的ですが、結果的に貧困と格差が拡大し、日本でも若者の二人に一人は非正規雇用労働者です。年収が3分の一になり、ワーキングプア＝働く貧困層と呼ばれます。

6、非正規雇用の成立要件

非正規雇用、これを昔風に言えば、年貢の3倍増です。年収200万円の人
の生涯賃金は1億円程度です。終身の正社員雇用と年功賃金制度では2～3億円が相場でした。

この非正規制度がいま成り立っているのは、正社員である団塊の世代を親に持っているからです。（日本のアジア労働者の収奪を前提としてですが）。だがこれが終わる20年後に彼ら若者は最低生活保障を失います。食えなくなるのです。

7、労働者の争議権

では労働者の争議（一揆）の形式は何が一番か。それは逃散＝生産放棄＝労働者ではストライキです。

日本ではストを否定して、資本家と協調をする労組（連合）の時代です。これが正社員・本工主義として存在し、非正規者の反乱を未然に防止しています。

しかし、100年に一度の世界大恐慌時代には、企業内の協調派の正社員の条件や権利の保障も危うくなり、一方、非正規契約社員も生活できなければ、いつかはこれも破綻します。人が人らしく生きていくことが、一番優先されるのが歴史の法則だからです。

8、改憲と労働者

このような労働者の反乱を恐れる人たちが、労働者と労組を弾圧します。現在でいうと憲法に規定される基本的人権や労組、労働者の権利をはく奪する。これが橋下や石原が進めるファシズム派の強権政治です。

これは新自由主義のもと中曽根らが始めた戦後政治の総決算路線の攻撃が、解雇自由社会（国鉄改革や社保庁解雇、JALつぶしと解雇など）であり、非正規雇用が、この出発点であり、目的地が改憲なのです。

郵政産業労働者ユニオンはこうしたものと闘う労組です。

9、流浪の民、3鼎立

1989年11月21日、総評が解散し、大半が連合へ参加しました。労働界再編でした。当時の自民党の竹下首相らは「頼ずりしたい」と歓迎しました。

しかし、どうにもまとまらない総評内の反対派は連合、全労連、全労協へと3分解し、党派もそれぞれ分解しました。まさに定住の地を失ない、流浪の旅に出た姿に似ています。

以来23年。全労協を立ち上げた国労も国鉄改革＝解雇撤回の闘いを敗北の中に終えました。一方、全労連も、万々歳だとは言えない状況です。主力の組合が公務員攻撃の中で、まさに極右の橋下、石原の台頭で、労組否定の総攻撃を受けています。

連合でいいと思う人は当座、おくとして、全労協と全労連は、労組解体攻撃＝解雇自由社会を共に闘うときです。同じ日に、同じ闘いを挑むための協議を始め、統一闘争、相互信頼をいまからはじめないと、個別撃破、左派は大敗北となります。これは誰もが見える構図、情勢です。

労組ナショナルセンターの3鼎立はまさに左派労働者の流浪の時間です。これを克服し、世界で闘われている新自由主義との闘いに合流する。そのためには日本で統一戦線を組むことは、正しい路線です。

10、若者の自主的な運動で時代を変える

非正規制度の撤回、富裕層優遇を変える。こうした政治、国づくりの共同闘争が必要なことは、労働者ならばだれでも異議なしの総論賛成です。思想信条の違い、

その他の違いを棚上げして、労組として団結する時代。これが各論実行で、そして今です。

日本労働運動の常識では、これは難しいとされます。また郵産労と郵政ユニオンの統合など、「おかしいよ」とか、「大丈夫かい」とも言います。そういう人たちは70年代以降の歴史として、相互不信が根強いのです。

しかし、過去の闘いの財産は貴重ですが、現実の労組は、非正規時代を阻止できなかったことから、貧困と格差の半分の加害者的存在とも批判されています。左派でもこれは同じです。労組の財産の多くは失われ、次世代の人たちは、過去だけでなく、明日を語ることの重要性を感じています。

労組も若い次世代の政治的指導部を育成し、引き継ぐことは重要です。若い層は昔の相互対立を知りません。「統一のなにが悪いの」とも言います。案外、それでいいのではないかとも思います。

いま脱原発で、数万人規模のデモが起きていますが、労組が主導しているものではありません。いやそれどころか、電力会社の労組は脱原発を批判しています。まさに若者たちが生きる権利を求めて、自主的な闘いとして発想し、行動する。まさに異議申し立てを行っている人々と敵対する労組であってはなりません。こうした運動の大衆化を見ると、労組や党派も過去の対立と分裂の歴史と体質を若い世代を中心にして、見直すときなのです。

なぜなら、この若者たちが言う組織再編統合へ、何も対応しなかったならどうなるのか。組織の若者離れがさらに進み、労組は分裂・非力なまま、現行の本工主義の既得権的労組で、非正規、解雇自由時代が続き、左派の労働者は窒息させられるのです。これは確実です。こうしてみると、過去と今の違いを棚上げにしても、未来に目を転じた「統一」はなににも増して大義です。

11、現場の声で運動を

長崎からは全国はよく見えませんが、しかし、現場労働者の声は聞こえます。彼らの期待は、ユニオンと郵産労が「統一してくれたらな」だったので。

全国的視野でいうと、全労連、連合、全労協がまとまる。これを目指すことは正しいことです。そのためには、企業内の左派で、分裂している複数の労組がまずまとまる。これが第一歩です。これがなくして、全体の統一も勝利もあり得ません。これが大元です。

私たちの統一は空論ではなく、現実の出来事です。「どうせうまくいかない」と距離を置いてきた人たちも、統一のための絵図面を自ら示し、現実的に統一のための闘いを大衆的に提起すべきです。

統一後、私たちには様々に困難な事態が出来すると思います。しかし、共同闘争をしている限り、また相互の上部、地域組織の支持、支援がある限り、道をたがえるはずはありません。必ず、困難を乗り越え、郵政運動での闘う労組の再編を成功させます。これが新労組の決意であり、共通認識です。

12、三鼎立の固定化打破を

日本の労組再編の困難性は、協調派の左派排除に起因しますが、結果的に三鼎立の固定化から生まれています。それにはそれなりの歴史があり、それぞれに主張があります。しかし、いま進む国家再編=改憲とは、この労組の歴史や主張も含め、一気に「御破算」とする強権的な攻撃です。

23年前の労働界再編では、労使対立(総評)から労使協調(連合)に旗が変わりました。いま進む攻撃は、国家主義的立場から、その旗すら否定し、一切の権利をはく奪し、労使対等ではなく、絶対服従支配を目指すものです。

解雇自由、非正規時代からさらに、服従支配の時代への転換の中、次の労働運動の分岐が眼前にあるのです。統一を避けて、現状を許すのか。あるいは統一をなし、左で再生を目指すのか。この選択が突きつけられています。

新生ユニオン=郵政産業労働者ユニオンは、これを統一の旗で自ら有言実行し、鼎立固定化に風穴をあけ、全体の再編統合の起点になります。

13、旧ユニオンの仲間へ。

確かに郵政ユニオンは、結成の旗が反連合、非全労連でしたので、路線的には転換だとして、新ユニオンに不参加や、あるいは参加した人にも「だめなら離れる」という人もおられると聞きます。

その方たちへ。

この統一は長い時間をかけて討論され、決定されたことです。その統一の大前提は、「全労協がある限り、ユニオンは全労協」ということが確認されています。

また討論経過を民主的ではないと批判されてもいますが、6年かけて真剣に討論したのが新生ユニオンです。仮にそれでも民主的ではないとするなら、全国の仲間の力で、さらに民主的なものを作り上げようというのが新労組です。

今後、不都合が生まれても、それを相手のせいにせず、また統一の結果だともしないことです。異なった組織の統合です。最初からすべてにうまくとは限りません。ここは辛抱です。

14、統一論の結論

そうは言うけど、連合多数派を除いて少数派だけ統一して何の意味があるの、の論に。そしてもう一つ。ユニオンが郵産労へ吸収されただけで、これを統一の糸口とは呼ばない、という論へ。

統一論は、最後は必ず、ここへ行きつきます。

そこで、結論から。では、日本労働運動はこのまま三鼎立でいいのですかと、問いかけます。そうではないはず。だから、一日でも早く、できるところから統一する。これが今回の統一であり、道は正しいのです。

吸収合併論は、この全体の統一の大義の前にはいかに小さい視野であることが。労働者は一人では弱い存在であるからこそ、組織を作り、ともに闘うために作られました。一緒に闘えば、信頼は得られます。全国、全世界の労働者がともに闘う。これを確立するために最初の小さな統一と闘いがあるのです。

夢は大きく、まとまりの原点は闘う労働者です。これを共通項として、闘う相手は新自由主義と郵政です。これを確認すれば、ともに頑張れます。

15、さいごに

本紙「未来」はこの歴史的統合を前に、「統一の成功を」の記事を二度、結成大会報告を三度。そして、目指すものを三度、二週間に全八回のシリーズで発行しました。一地方の機関紙でありながら、これほど労組統一に力を入れたのは、22年前の郵政全労協を作ったころの、解体的危機という組織的体験を共有してきたからです。分裂と解体の危機には「統一は大義」という言葉を心でくり返す。そのために本誌「未来」の特集号が役立てばと念じています。

以上で、新労組の目指すものの連載を終わります。みんなでがんばりましょう。

(月刊「地域と労働運動」2012年8月号に掲載されたものです。)